

アイスランド語における副次強勢とリズムに関する一考察

その他（別言語等） のタイトル	An Essay on the Secondary Stress and the Rhythm in Icelandic
著者	三村 竜之
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	13
ページ	1-14
発行年	2015-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3810



アイスランド語における副次強勢とリズムに関する一考察

その他（別言語等） のタイトル	An Essay on the Secondary Stress and the Rhythm in Icelandic
著者	三村 竜之
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	13
ページ	1-14
発行年	2015-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3810

アイスランド語における 副次強勢とリズムに関する一考察*

三村 竜之

An Essay on the Secondary Stress and the Rhythm in Icelandic

Tatsuyuki MIMURA

要旨: 北ゲルマン語の一つであるアイスランド語は英語やドイツ語と同じくストレスアクセントの言語であり、語は主強勢を担う音節を必ず一つ有する。従来、副次強勢は主強勢を担う音節(人名や並列的複合語など一部の例外を除き、全て語の第一(左端の)音節)から数えて奇数番目の音節に現れるとされてきた(例: 第3音節、第5音節、等々)。しかしながら、なぜこれらの強勢を全て一律に「副次」強勢と判断するのか理論的な根拠が全く示されておらず、また反例と思われる具体的事例も確認されている等、先行研究には種々の問題点や検証すべき課題が残る。

そこで本小論では、語形や語構造、前後の環境など様々な条件の下で採取した一次資料を通じて先行研究の主張を批判的に検証し、アイスランド語のリズムの仕組みに関して詳細に考察するとともに、アイスランド語における副次強勢の生起条件とその音声的・音韻論的特性を明らかにする。

キーワード: 副次強勢、リズムの拍、発話速度、強調、複合語アクセント

1 序

1.1 本研究の目的

従来、アイスランド語では、副次強勢(secondary stress)は語に複数存在しうるもので、その位置は主強勢の位置を基に予測可能であると主張されてきた。しかしながら、このような先行研究の主張に反すると思われる事例も少なからず確認されており、また、先行研究が「副次」強勢と説く現象の音声学的並びに音韻論的な実態が未だ明確でない等、種々の理論的な不備が残されている。

そこで本小論では、筆者が独自に採取した一次資料に基づき先行研究の検証並びに検討を行い問題点や理論的な不備を明らかにするとともに、それらの解消を通じて、アイ

スランドにおける副次強勢の本質とリズムの仕組みを明らかにすることを試みる。

1.2 アイスランド語について

アイスランド共和国(人口約 32 万人 (*Hagstofa Íslands* 2013); 首都: レイキャヴィーク Reykjavík) の公用語。印欧語族ゲルマン語派に属し、デンマーク語やノルウェー語などと共に北ゲルマン(ノルド)諸語を形成する。その他のノルド諸語に比して古語の姿を色濃く残しており、未だ形態論や統語論が複雑な点で特異である。

音韻論的には、無論、英語やドイツ語などには立てられない音素が立てられうるものの、音素配列の傾向性や音節量の制約など、その他のゲルマン諸語に通ずる性格を多く有する。また、閉音節における母音量(母音の長短)と音節末子音の数の間に見られる制約など、(デンマーク語を除く)ノルド諸語特有の特徴も保持している。その一方で、ゲルマン語ではごく一部の方言にのみ観察される「前気音 preaspiration」(^h]で表記)を有し、また無声の鳴音¹(sonorants)も比較的豊富なため、全体的に無声摩擦音が豊富であるかのような聴覚印象を与える²。

- (1) a. *Kaupmannahöfn* [k^hœy^hp.man.na.hœpn̥] 「コペンハーゲン【固有名詞】」
 b. *pappirsbolli* [p^háhp.pirs.bòt.t̪ɪ] 「紙コップ」

なお、ノルド語の諸方言では、例えばスウェーデン語やノルウェー語の多くの方言に見られるような音韻論的に有意義な音調や、またデンマーク語の多くの方言に見られるような「声門狭窄」が強勢を担う音節に現れることがあるが、アイスランド語にはそのような付随的な音声現象は観察されない。

1.3 調査概要

本小論考にて引用する資料は、先行研究からの引用等、特に断りのない限り全て筆者が実地調査を通じて採取した一次資料である。調査は 2013 年 8 月から 9 月、2014 年 3 月並びに 9 月に Reykjavík 市内のインフォーマント宅にて実施。インフォーマントは以下に示す一名:

- (2) Auður Guðmundsdóttir 氏 (女性)

- Reykjavík にて生育 (1955 年生まれ)
- 日本の小・中学校にほぼ相当する grúnnskóli にてアイスランド語とデンマーク語の教師として教鞭をとる
- 母語であるアイスランド語の他、デンマーク語と英語の高い運用能力を有する

資料の採取方法は、基本的にはいわゆる「調査票読み上げ形式」であるが、適宜、調査項目や関連事項に関する質問も併せて行った。媒介言語にはデンマーク語を使用。調査ノートを使用した資料の記録に加えて、インフォーマントの許可を得た上で、調査の一部始終を IC レコーダーを用いてデジタル媒体として記録した(調査項目に関しては 3.1 節を参照)。

2 先行研究の概要と問題点

2.1 アイスランド語のストレスアクセント：主強勢の位置について

後述する通り、副次強勢に関する先行研究の主張には主強勢の存在が関係している。従って、先行研究の主張を批判並びに検討するにあたり、まずはアイスランド語における主強勢に関して概観する。

アイスランド語は、主強勢を伴う音節が語に必ず一つ存在し、語中における主強勢の位置は（一部の例外的な事例³を除き）全て第一（左端の）音節である（三村 2014）。具体例を以下に示す（便宜上、ここでは副次強勢の表記は割愛する）：

- (3) a. *banki* [báʊŋ.kɪ] 「銀行」
- b. *herbergi* [hér.ber.ɡɪ] 「部屋」

この規則は外来語や複合語にも適用される：

- (4) 外来語
 - a. *rabarbari* (*sic*) [ráb.bar.ba(ː).rɪ] 「ルバーブ【植物】」
 - b. *sukkulaði* [súʰk.ku.laː.ði] 「チョコレート」
- (5) 複合語
 - a. *Bankastræti* [báʊŋ.ka.stræ.tɪ] 【固有名詞（直訳「銀行通り」）】
 - cf. *banki* [báʊŋ.kɪ] 「銀行」
 - stræti* [stræ.tɪ] 「通り」
 - b. *rabarbarakaka* (*sic*) [ráb.bar.ba.ra.kʰɑː.kʰɑ] 「ルバーブジャムのケーキ」
 - cf. *rabarbari* (*sic*) [ráb.bar.ba(ː).rɪ] 「ルバーブ」
 - kaka* [kʰɑː.kʰɑ] 「ケーキ」

以上を要約すると、アイスランド語の主強勢は、（別途、語の意味特性から説明可能である例外的事例を除き）語種や語構造の別を問わず常に左端の音節に主強勢が置かれる、と結論づけることができる（日本語方言アクセント論の用語を借りるならば、アイスランド語のストレスアクセント⁴は「一型アクセント」と言えよう）。

2.2 先行研究の概要

興味深いことに、アイスランド語音韻論の研究書並びに研究論文や概説書では、語における副次強勢の位置に関する記述が必ずと言ってよいほど見られる。例えば、Árnason (2005: 1564) “Word stress is basically initial . . . and there is a rhythmically motivated secondary stress on alternating syllables.” と述べ、*tAska* 「カバン、ブリーフケース」や *Almanak* 「暦」を例として挙げている（便宜上、先行研究の資料に関しては、主強勢の置かれた母音を大文字で、副次強勢の置かれた母音に下線を付して示す）。

同趣の一般化は Dehé and Wetterlin (2013: 229) や Rögnvaldsson (2013: 48)、Pétursson (1978: 57) などにも見られ、主強勢が（原則的に）置かれる第一音節を除く奇数番目の音節に副次強勢が置かれると説いている（便宜上、先行研究におけるこの一般化を「リズム規則」と呼ぶことにする）。

上述の副次強勢は単純語（単一の形態素からなる語）におけるものであるが、先行研究では複合語における副次強勢に関しても言及している。例えば Dehé and Wetterlin (2012)は “. . . compounds whose first component consists of three syllables have secondary stress on . . . the first syllable of the second component However, if the first morphological component is monosyllabic, . . . and the first syllable of the second component . . . does not receive secondary stress but rather secondary stress falls on the third syllable . . . as in simplex words.” と述べ、複合語前部要素の長さ（音節数）に応じて副次強勢の分布に差異が観察されることを主張している。また、Kristinsson (1998: 24)も *skólastofa* 「教室」と *bOrðstofa* 「ダイニングルーム」などを例に挙げ、同じく前部要素の長さと副次強勢の分布に関して相関関係があることを主張している。

以上、先行研究における要点をまとめると以下の通り：

- (6) 「副次強勢」に関する先行研究の主張
 - a. 主強勢の置かれた音節（原則的に第一音節）を除く奇数番目の音節に副次強勢が現れる
 - b. 複合語の全部要素が多音節語の場合は後部要素の第一音節に副次強勢が現れるが、前部要素が一音節語の場合は a. の規則に従い第一音節を除く奇数番目の音節に副次強勢が現れる

2.3 問題の所在

前節にて概観した先行研究の主張には、論理的な問題点や不備が幾らか残るように思われる。具体的には以下に示す三点：

- (7) a. 「強弱」の交代現象の検証と成立条件：反例が存在？
- b. リズムの拍の全てが「副次強勢」か？
- c. 「副次強勢」の所在を認定する根拠：「副次強勢」の実態とは？

次節以降、上記の問題点や疑問点、並びにこれらにまつわる問題点について、詳細に論じていく。

3 リズム規則の修正と副次強勢の音韻論的位置付け

3.1 本研究の資料

既に言及したように、本研究が依拠する資料は全て筆者が採取した一次資料である。先行研究における疑問点や問題点を解消すべく、実地調査では一音節語や二音節語（多くが固有語）に加え、以下に示すように、外来語や複合語など三音節以上の多音節語も調査項目として多数選定し、また引用形以外の形での採取も試みた：

- (8) a. 三音節以上の語：
 - i. 外来語
 - ii. （語種を問わず）屈折形

t.d.	kennari kona barn	kennarinn konan barnið	kennarar konur börn	kennararnir konurnar börnin
1.	appelsína			
2.	banani			
3.	háskóli			
4.	höfuðborg			
5.	hestur			
6.	kjúklingur			
7.	stórborg			

図 1: パラダイムを用いた調査票
(一部を抜粋)

- ii. (語種を問わず) 屈折形
- iii. 複合語 (一音節語のみからなる複合語も採取)
- b. 上記の語 (の一部) を引用形以外の形で採取:
 - i. パラダイム (語形変化表) の空所を補う形にて読み上げ
 - ii. キャリアセンテンスを用いた読み上げ

なお、(8b.i)に示したパラダイムの空所を補う形式の読み上げ調査と、(8b.ii)に示したキャリアセンテンスを用いた読み上げ調査に関して若干の補足を行う。まず、前者の調査であるが、図 1 に示した調査票 (一部を抜粋) を用いて行った。また、後者の調査では、

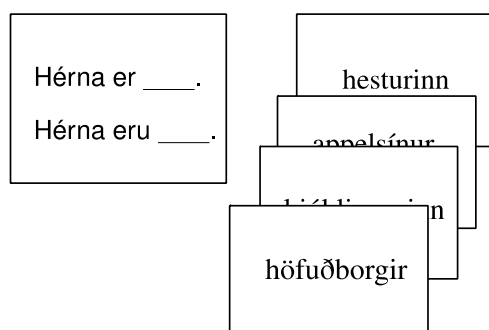


図 2: キャリアセンテンスと
目標語のカード

は、3×5 インチの情報カードにキャリアセンテンスと目標語 (target words) を別々に表示し、筆者がランダムに目標語を提示しながらインフォーマントにはキャリアセンテンスの空欄を補い文全体を読み上げてもらった (調査のイメージは図 2 を参照)。

3.2 リズム規則の検証: 強弱交代の成立条件

まず第一の疑問点として、先行研究が論拠とする具体的資料に反すると思われる資料が筆者の調査で採取されたことが挙げられる。確かに、先行研究では「強弱」の交代現象が義務的に生

じると明言はしていないが、その一方で、交代現象の成立条件に関しても何ら言及はなされていない。そこで、今一度、先行研究の主張する「強」と「弱」が交互に現れるというリズム規則の妥当性や成立（しやすい）条件について考察する。

まず単純語に関して。先行研究では以下の語を例に挙げて、単純語において「強」と「弱」の交代現象が生ずることを指摘している（強勢の表記は先述の通り⁵）：

- (9) a. (i) *Almanak* 「暦」 (e.g. Árnason (2011: 271; 2005: 1564))
 (ii) *Akvarella* 「水彩絵の具」 (e.g. Árnason (2011: 271; 2005: 1564))
 b. (i) *kennari* 「教師」 (e.g. Rögnvaldsson (2013: 48))
 (ii) *hesturinn* 「馬 SG.NOM.DEF.」
 (e.g. Dehé and Wetterlin (2012), Thráinsson (1994: 149))
 cf. *hestur* 「馬 SG.NOM.INDEF.」

上に示した語例のうち、(9a)に示したものは筆者の資料でも下線部の母音（を含む音節）に副次強勢と考えられる卓立を確認することができた。一方、(9b)の語例に関しては、筆者の採取した資料では下線部の母音（を含む音節）に卓立は確認されなかった。

検証のために、(9a.i)の *almanak* と、(9b.i)の *kennari* と音節構造や音節の配列が類する *leikari* 「俳優」とを比較してみたが、*lekari* の第三音節 *-ri* には聴覚的に際立った卓立は観察されなかった⁶：

- (10) a. *almanak* [ál.ma.nà:k^h] 「暦」
 b. *lekari* [léɪ.k^ha.ri] 「俳優」

続いて複合語に移る。前部要素が多音節語の場合は、(11)に示すように、先行研究の主張と同じく筆者の資料においても後部要素の第一音節に副次強勢（と推定される）卓立を観察することができた：

- (11) a. *bananakaka* [bá:na.na.k^hà:k^ha] 「バナナケーキ」
 (< *banani* [bá:na.ni] 「バナナ」 + *kaka* [k^há:k^ha] 「ケーキ」)
 b. *ferðamaður* [fé:ða.mà:ðu] 「旅行者」 (e.g. Árnason (2011: 272))
 (< *ferða* [fé:ða] 「旅行する」 + *maður* [má:ðu] 「男、夫」)
 c. *skólastofa* [skóɔ̯.la.stò:va] 「教室」
 (< *skóli* [skóɔ̯.li] 「学校」 + *stofa* [stó:va] 「居間」)

その一方で、前部要素が一音節語の場合は、(12)に示すように、先行研究の主張する「強弱」交代のリズムが観察されない語例も確認された：

- (12) a. *brúnkaka* [brú:n.k^hà:k^ha] 【クリスマスの伝統的なお菓子】
 (< *brúnur* [brú:nu] 「茶色い」 + *kaka* [k^há:k^ha] 「ケーキ」)
 b. *kaupmaður* [k^héɥ̥.p.mà:ðu] 「商人」
 (< *kaupa* [k^héɥ̥.pa](sic) 「買う」 + *maður* [má:ðu] 「男、夫」)
 c. *borðstofa* [bórð.stò:va] 「ダイニング」
 (< *borða* [bór.ða] 「食べる」 + *stofa* [stó:va] 「居間」)

ここで注意すべきは、以下に示す(13c)のように「強弱」の交代が(常にというわけでは
ないものの)観察される例が存在する点である:

- (13) a. *bókaherbergi* [bók̚.kʰa.hér.ber.ɡi] 「書齋」
(< *bók* [bók̚kʰ] 「本」 + *herbergi* [hér.ber.ɡi] 「部屋」)
b. *svefnherbergi* 「寝室」 [své:pn̩.hér.ber.ɡi]
(< *svefn* [své:pn̩] 「睡眠」 + *herbergi* [hér.ber.ɡi] 「部屋」)
c. *baðherbergi* [bá:ð̩.hér.ber.ɡi] (~[-her.ber.ɡi]) 「浴室」
(< *baða* [bá:ð̩] 「入浴」 + *herbergi* [hér.ber.ɡi] 「部屋」)

以上の資料から筆者は以下のような仮説を立てる:

(14) 先行研究の主張する「強弱」の交代現象はある条件の下で成立しない場合がある
その条件として、現時点では「発話速度(テンポ)」と「強調(フォーカス)」の二点を
推定している。

まず一つ目の「テンポ」に関して。筆者のインフォーマントはアイスランド語教師と
いう職業柄故か、非常にゆったりとしたテンポで調査項目を読み上げる傾向が著しく強
く、そのため「強弱交代」のリズムと発話速度の間には何らかの関係があるのではない
かと推測される。現に、(全ての項目で行ったわけではないが)発話速度をやや上げて読
み上げ直してもらったと、語によっては「強弱交代」のリズムが観察されることが判明
した⁷。

続いて「強調(フォーカス)」に関して。例えば Thráinnsson (1994: 149)は *lEktor* 「講師
SG.NOM.INDEF.」や *lEktorarnir* 「講師 PL.NOM.DEF.」という例を引き、本来、副次強勢を有
さない語であっても音節数の増加に従い、奇数番目の音節に副次強勢が現れると指摘す
る。この現象を検証すべく、筆者も先行研究に倣い、屈折接尾辞を付加することで語の
音節数を増やした語形の読み上げ調査を行った。その際、先述の図1に示した語形変化
表の空所を補う形式の調査票を使用した。

筆者の調査の結果、(15)に示すように、先行研究の唱える「強弱」の交代リズムの観
察されない事例が確認された:

- (15) a. (i) *lektor* [léx.tò:r̥](sic) 「講師 SG.NOM.INDEF.」
(ii) *lektorarnir* [léx.to(:).raɾt.nì:r̥] 「講師 PL.NOM.DEF.」
b. (i) *hestur* [hés.tu:r̥] (~[hés.tà:r̥]) 「馬 sg.nom.indef.」
(ii) *hestar* [hés.tà:r̥] 「馬 pl.nom.indef.」
(iii) *hestarnir* [hés.taɾt.nì(:):r̥] 「馬 pl.nom.def.」

特筆すべきは、先行研究の唱える強弱の交代が観察されないだけでなく、先行研究では
副次強勢が現れないとされる音節に卓立が観察されるという点である⁸。例えば
lektorarnir の -*nir* や *hestar* の -*tar* など偶数音節には副次強勢が置かれないはずであるが、
筆者の資料では卓立を観察することができる。

語形変化表を応用した調査票の形式を鑑みて、筆者は(15)の資料を次のように解釈す
ることを提案する:語形の差異を明示する意図が作用し、本来ならば先行研究の唱える副

次強勢の置かれない偶数音節である接尾辞を「強調」すべく、強勢が置かれた。この解釈に従えば、*hestur* の第二音節 *-tur* に観察された卓立も、*hestar* との対比から生じたものであると説明することが可能である⁹。

以上の議論を要約すると、(厳密な規定は困難ではあるが)いわゆる「自然」でかつ中立的な発話であれば、先行研究の主張する「強」と「弱」の交代するリズムは成立すると推定されるが、比較的遅いテンポや強調など、発話の「自然さ」の度合いを引き下げる要因が加わった場合、強弱交代のリズムは崩れうると結論づけることができる。

3.3 リズムの拍と副次強勢の分離

既に先行研究も ‘rhythmically motivated’ と述べているところから明らかではあるが、先行研究の主張する「副次強勢」とは(一部の複合語の例を除いて)いわゆるリズムの「拍(ビート)」である。つまり、先行研究の主張に倣えば、アイスランド語のリズムは音節を単位として「強」と「弱」が交互に繰り返すリズムということになるが、主強勢以外の「強」を全て一律に副次強勢と捉えるその根拠は一体何であろうか。少なくとも管見に及ぶ範囲では、いかなる先行研究においてもその根拠は示されていない。

そもそも純粋に物理音声学的に見れば、主強勢を担う音節の調音にエネルギーを費やした後は、語末に向けて漸次的に調音エネルギーは減衰するはずであり、その結果、強勢の度合いは語末に向けて段階的に低くなっていくため、リズムの拍を全て一律に副次強勢として扱うことは現実に反していると考えられる。現実に反してまで一律に副次強勢として扱うためには理論的に見て積極的な根拠が求められるが、先行研究にはそれが示されてはいない。また、リズムの拍という観点から見れば、主強勢もその一部を担っているはずであり、音声実質に即した解釈としてはむしろ自然かつ妥当である。従って、先行研究が用いている「副次強勢」という用語は、少なくともリズムの拍に対して用いるのは不適切であると言わざるを得ない。

そこで筆者は、先行研究が一律に「副次強勢」として扱ってきたもののうち、いわゆるリズムの拍と複合語後部要素に現れる副次強勢を異なる概念として分離することを提案する。筆者の立場では、リズムの拍とは主強勢をも含めた、いわば発話において観察される聴覚的な卓立の総称であり、複合語の後部要素に現れる副次強勢はそのような卓立の一部として具現化並びに機能しているに過ぎない、と捉える(複合語における副次強勢の扱いに関しては 3.4.2 節を参照)。

3.4 副次強勢の認定条件

3.4.1 強勢の認定条件

ある音節にリズムの拍や副次強勢が置かれていると主張する場合、何を根拠としてその存在を認定するのか。そもそも、ある音節が強勢を担う場合、その音節はいかなる条件を満たす必要があるのだろうか。例えば、Rögnvaldsson (2013: 48)によると *kennari*「教師」は *kEnnari* という強勢の型を有しており、副次強勢が左から数えて 3 番目の音節で

ある *-ri* に置かれていると述べているが、何を根拠として短母音開音節である *-ri* に副次強勢が置かれていると認定するかに関しては全く言及していない。同様にある種無批判に副次強勢の存在を認める傾向は、管見に及ぶ範囲では全ての先行研究に見られる。

多音節語において任意の音節が副次強勢を担っていると捉える場合、当然のことながら、主強勢を担う音節や全く強勢を担っていないと考えられる音節（いわゆる「弱強勢」を担う音節）との相違点を明確にせぬままでは、副次強勢の存在を認定することは不可能である。今一度、副次強勢のみならず、強勢の所在を認定する根拠としてどのような要素が必要であるか、考察する必要がある。

そこで筆者は、強勢を担う音節の諸特徴を明らかにすべく、一音節語の音節構造と音調の型や複合語を含む多音節語の音調の型を精査する。一音節語はそれ自体が強勢を担う音節として機能しており、従って、一音節語を観察することで強勢を担う音節が充足すべき諸条件を明らかにすることが可能であると考えられる。種々の品詞から具体例を以下に引く（拙論 2014: 159-160; 語例や音声表記等を一部改変）:

- (16) a. *sjö* [sʲø:] 「七」, *bý* [bí:] 「住んでいる 1ST.SG.PRES.」
b. *glas* [glás] 「グラス、コップ」, *ís* [ís] 「氷、アイスクリーム」
c. *vatn* [váʰtʰn] 「水」, *oft* [óft] 「度々」
d. *dönsk* [dóensk] 「デンマーク(語/人)の」, *ensk* [énsk] 「英語の/イギリス(人)の」

上に示した一音節語は、全て強勢を担いうる音節として適格な構造を有している。注目すべきは、(16)の語例には V あるいは VC 構造を有する語が存在しないという点である。確かにアイスランド語には *i* [i] 「の中に」の様に短母音開音節である語も存在するが、強勢を担うことはない。また、(16)の語例を精査すると、音節が強勢を担いうるか否かを決定する条件としては音節頭子音(onset)の有無や数は関与しないことが読み取れる。以上から、**強勢を担いうる音節は V(C) 構造は許されない**という構造的制約を導くことができる(i.e. ‘weight-sensitivity’; e.g. Hulst (2014: 17); なお、強勢と音節量との間の相関関係は、例えば、(15)に示した *hestar* の第二音節 *-tar* と *hestarnir* の第二音節 *-tar-*との比較からも読み取ることが可能であり、強勢の有無に付随して母音量に増減が生じている点に注意されたい)。

また音調に関しては、聴き取り調査を通じて採取した引用形(citation forms)を観察した結果、一音節語には主として高く平らな音調(H)が、また任意で下降調(F)も現れることが明らかとなった。

続いて多音節語に移る。引用形では多音節語は以下に示すような音調型を伴う((17a)は二音節語、(17b)は三音節語の例; L は低く平らな音調¹⁰を表す):

- (17) a. (i) *dagur* [dát.ʏʉ HL~FL] 「日、一日」
(ii) *tala* [tʰát.la HL~FL] 「話す INF.」
b. (i) *maðurinn* [mát.ðʉ.rm HLL~FLL] 「男、夫 SG.NOM.DEF.」
(ii) *herbergi* [hér.ber.gi HLL~FLL] 「部屋」

(17)に示した語例から、多音節語において強勢を担う音節の構造と音調に関して以下

の点を読み取ることができる：音節は弱音節に比して音調が高く、任意で下降調も現れうる；VV（長母音開音節）あるいはVCという構造を取りうる。

続いて多音節語の例として複合語を取り上げる。複合語は強勢を担う音節を有する語（自由形態素）を複数個結合させて産み出すものであり、従って、強勢を担う音節を複数有する多音節語として捉えることができる：

(18) a. *Bankastræti* [báʊŋ.ka.stræ.ti HLML~HLFL] 【固有名詞（直訳「銀行通り」）】

cf. *banki* [báʊŋ.ki] 「銀行」、*stræti* [stráɪ.ti] 「通り」

b. *skólastofa* [skóʊ.la.stó.va HLML~HLFL] 「教室」

cf. *skóli* [skóʊ.li] 「学校」、*stofa* [stó.va] 「居間」

(17)の語例と同様、(18)の語例からも、多音節語において強勢を担う音節が弱音節よりも高い音調を伴うことを読み取ることができる。

以上、単音節語と多音節語の音節構造や音調を精査した結果、アイスランド語では(19)に示す条件に基づき、任意の音節における強勢の所在を認定することができると結論づける：

(19) a. 短母音開音節 (V) 以外の構造を有する

b. (多音節語であれば隣接する音節に比して) 高い音調を伴う音節

(b.に加えて、任意で下降調（音調の動き）が現れる音節)

以上から、少なくとも筆者の解釈では、Rögnvaldsson (2013: 48)の主張に反して *kennari* の第三音節-*ri* には副次強勢は置かれていないと考えられる。また、仮にリズム規則により副次強勢が置かれていたとするならば、Rögnvaldsson の主張とは異なり、当該音節は長母音開音節の構造を有するはずである。

3.4.2 副次強勢の音韻論的位置付け

前節では、アイスランド語において強勢を担う音節が充足すべき条件や制約について論じたが、これらの条件や制約に関連して一点問題点が残っている。それは、重音節からなる二音節語の扱いである。

例えば、*maður* 「男、夫」は長母音開音節である *ma-*と短母音閉音節である *-ður* という二つの重音節からなるが、第二音節-*ður* に副次強制が置かれているか否かを判定することは、前節にて導いた諸条件のみでは実は不可能である。というのも、音調の高さが論拠となりうるものの音調の高さとは相対的な概念であり、第一音節に主強勢が置かれていると判断される以上、第二音節の音調の高さを証明するためには最低でももう一つの音節が必要となるからである。

この問題を解決するにあたり、筆者は後部要素が一音節語である複合語について考察したい。そもそも、先行研究では後部要素が一音節語である複合語に関しては全く言及がなく、副次強勢が置かれるのか否かに関しても先行研究の解釈は不明である。特に前部要素が一音節語である二音節の複合語の場合は、そもそも後部要素に副次強勢の存在を認めて良いかどうか、上で述べた単純語と同様の問題点が生じる：

(20) 前部要素が一音節語

- a. *eldhús* [élt.hù:s] 「台所」 (< *elda* [élt.ta] 「調理する」 + *hús* [hú:s] 「家」)
- b. *stórborg* [stóʊr.bòrg] 「大都市」 (< *stór* [stóʊr] 「大きい」 + *borg* [bórg] 「都市」)

cf. 前部要素が二音節語

- c. *þvottahús* 「クリーニング店」 (< *þvotta*(?) [θvóʰt.ta] 【意味?】 + *hús* [hú:s] 「家」)
- d. *höfuðborg* [hóe:vuð.bòrg] 「首都」 (< *höfuð* [hóe:vuð] 「頭」 + *borg* [bórg] 「都市」)

そこで筆者は、(上に引用した資料では既に accent aigu を付してあるが) 後部要素が一音節語である複合語でも後部要素に副次強制が置かれている、と解釈する。論拠としては以下の二点。まず第一に、二音節からなる複合語(e.g. *stórborg*)の後部要素(-*borg*)と重音節二つからなる二音節の単純語(e.g. *maður*)の第二音節(-*ður*)との間に、卓立の度合いの点で常に顕著な差異が確認されるか疑問が残るという点が挙げられる。

第二の論拠としては、副次強勢の存在が複合語の内部構造と密接な関係にあり、それ自体の音韻論的な自律性は極めて低いという点が挙げられる。確かに(21)に示すペアのように、副次強勢の位置が音韻論的に有意義であるように思われる複合語も存在するが、「後部要素本来の主強勢が複合語の副次強勢として実現する」という複合語アクセント規則を仮定すれば、副次強勢の位置は複合語の内部構造から予測可能である。

- (21) a. *hvítvínsglas* [kvít.vins.glàs] 「白ワイン用のグラス」
(< *hvítvín* [kvít.vìn] 「白ワイン」 + *glas* [glàs] 「グラス」)
- b. *plastvínsglas* [plást.vím.glàs] 「プラスチック製のワイングラス」
(< *plast* [plást] 「プラスチック」 + *vínsglas* [vím.glàs] 「ワイングラス」)

要約すれば、複合語における副次強勢の存在は、言うなれば、複合語の内部構造に関する情報を支えとして「解釈」を施した上で認定されるものである。従って、副次強勢自体の音韻論的な自律性は低く、そのため、具体音声のレベルにおいて当該音節の卓立の度合いが高いか否かは副次強勢の所在を認定する上では問題とはならないのである。なお、筆者のこの解釈の論理的な帰結として以下の結論を導き出すことが可能である：**副次強勢の概念は形態論的に複合的な語(典型例としては複合語)においてのみ適用可能な概念である。**

最後に、本節の冒頭にて触れた単純語 *maður* と複合語 *stórborg* の問題に戻る。複合語における副次強勢の存在や位置は複合語の内部構造から導くことが可能であるため、仮に具体音声のレベルにおいて *maður* の第二音節-*ður* と *stórborg* の後部要素-*borg* の間に卓立の度合いに差異が観察されなくとも、理論的に問題が生じることは全くない。というのも、複合語の内部構造という形態論的な情報を支えとすることで、前者における副次強勢の存在は積極的に排除され、また後者における副次強勢の存在は積極的に証明されるからである。

4 結語

4.1 まとめ

本小論ではアイスランド語におけるリズムと副次強勢に関して、筆者が採取した一次資料に基づき詳細に議論を行った。本研究の要点をまとめると以下の通り：

- (22) a. アイスランド語のリズムは、原則的には「強」が奇数音節に「弱」が偶数音節に現れる、強弱が交互に繰り返すパターンである。但し以下の条件下では「強弱」交代のパターンが崩れうる：
- (i) 発話速度が遅い場合
 - (ii) 特定の音節にフォーカスが置かれ強調されている場合
- b. リズムの拍と副次強勢の概念上の分離
- (i) 「リズムの拍」イコール「副次強勢」ではない
 - (ii) リズムの拍は主強勢も含めた強勢の総称
 - (iii) 副次強勢は複合語にのみ適用される概念
- c. 強勢の所在は以下の二つの条件から認定される：
- (i) 短母音開音節構造 (V) 以外の構造を有する
 - (ii) 隣接する音節に比して高い音調（音調の動き）を伴う

4.2 今後の課題

本研究の成果や導かれた結論をさらに強固なものとするには、解決すべき課題が数点残されている。まず第一に、本研究では先行研究の主張する「リズム規則」の存在を認めた上で、規則の適用を阻害しうる諸条件について考察したが、「リズム規則」自体の妥当性は未だ完全には検証されていない。筆者が唱えた「発話速度」や「強調」といった条件が真に「リズム規則」の適用を阻害するものであるならば、まずは「リズム規則」の存在を筆者独自の資料を通じて積極的に証明する必要がある¹¹。

次に、先述の第一の課題と密接に繋がる問題点であるが、そもそもいかにして「自然な」発話資料を採取するかという問題点が残される。何をもってして「自然」であると判断するかという理論的な問題点に加え、発話速度のコントロールなど調査方法に関する技術的な改善が求められる。おそらく、本研究で尽力してくださったインフォーマント以外にも複数の話者から資料を採取することが改善策として有効ではないだろうか。

最後の課題として、本研究ではリズムや副次強勢にまつわる「卓立」という現象を、聴覚印象に基づく主観的な観察のみから扱ってきた点が挙げられる。例えば研究の進んだ言語である英語でさえも、副次強勢の所在をいかに認定するかに関してはまとまった議論はなされておらず、ほとんどの場合が母語話者の内省的な観察に委ねられているという¹²。この事実は、そもそも副次強勢という現象が、非母語話者の調査者による主観的音声観察に耐えうるものではない可能性があることを示唆している¹³。今後はサウンド・スペクトログラフ等の分析機器を用い、定量的な分析処理を施すことで、客観性の高い信頼のおける資料を提示し、本研究で導いた結論をさらに強固なものとしたい。

注

* 本稿は、国立国語研究所プロジェクト共同研究第3回研究発表会（拙論 2014b）における口頭発表の内容、並びに配布した資料に基づくものである。同口頭発表に対して貴重なコメントを下さった聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。

¹ ここで言及した無声の鳴音が、いわゆる「無声の鳴音 voiceless sonorants」であるか、あるいは「無声化した鳴音 voiced sonorants」であるかに関しては、今後の詳細な音素分析が待たれる。

² 資料の音声表記は原則的には国際音声字母（IPA）による簡略表記である。但し、主強勢と副次強勢の記号にそれぞれ accent aigu と accent grave を用いるなど、一部、IPA の正用法と異なる表記法を採用している点に注意されたい。

³ 現時点での筆者の調査の範囲では、例外的に主強勢が第一音節以外の音節に現れる事例として以下の三つが確認されている：i) 並列的複合語；ii) 人名；iii) アルファベット頭文字語。なお、前掲拙論（口頭発表）に関して資料の再検討や再調査の余地が指摘されており、現在、再調査を進行中である。同拙論に関して貴重な批判を下さった聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げる

⁴ ここで用いた「ストレスアクセント」という用語は、少なくともここでの用法に限定すれば、「主強勢」と本質的に大差はない。しかしながら、（おそらく先行研究が「アクセント」と「主強勢」をほぼ同義の概念として用いているのに反して）筆者は独自の概念として「アクセント」という用語を用いているため、ここで若干の補足を行う。筆者は、韻律的に（換言すれば、語音のレベルとは別に）語（正確には「アクセント単位」）にまとまりを生み出し、且つ語（「アクセント単位」）を特徴付けるものを「アクセント」と捉え、その音声実現はアクセント自体を規定する上での必要条件ではないと考える（cf. Abercrombie 1960）。また、アイスランド語のみならず英語も含めて主強勢の位置は「局所的 local」ではあるが、具体音声のレベルでは主強勢の位置や音声特徴が隣接する音節を含めて語（「アクセント単位」）全体の(global)音形を規定するものであると捉えている。以上の理由から、筆者は、アイスランド語や英語などの強勢を「ストレス（強さ/強弱）アクセント」と敢えて呼んでいる点に留意されたい。

⁵ ここでの DEF. と INDEF. はそれぞれ「既知形 definite forms」と「未知形 indefinite forms」を指す。「既知形」とは大まかに述べると、定冠詞が接尾辞的に付加された語形であり、それに対して「未知形」はいわゆる不定形である。

⁶ 本小論考の基盤をなす口頭発表（拙論 2014b）では、引用した資料の音声を実際に聴衆に聴いていただき、その上で筆者の主張に対して異論が唱えられなかったことを念のために付記しておく。なお、本研究での卓立の度合いの検証はあくまでも聴覚的に行われたものであり、従って、スペクトログラム等の機器を用いての検証は行っていない（同じく、後述するテンポに関しても、聴覚的な検証にのみ依拠している点に留意されたい）。

⁷ 基本的に調査項目は引用形(citation forms)で採取しているが、この点が発話速度に何らかの影響を及ぼしているのではないかと仮定し、キャリア文を用いての読み上げ調査も行ったが、芳しい結果は得られなかった。

⁸ 先行研究の資料に反し、筆者の資料では *lektor* の第二音節 *-tor* に副次強勢（と推測される卓立）が観察された。

⁹ Einarsson (1945: 4) は “Endings . . . are never stressed,” と述べ、接辞に強勢が置かれることを言っているが、本研究の結果から、Einarsson の主張に反して条件によっては接辞も強勢を担うことが明らかとなった。

¹⁰ L のみならず、ここで用いた H や F の記号は、飽くまでも個々の音節の音調を相対的に捉えた言わば簡略的な標記であり、従って、等しく L の記号を用いて表記された音節であっても実際の音調の高さは厳密には異なる点にくれぐれも留意されたい。

¹¹ この問題点は上野善通先生（東京大学名誉教授）よりご指摘をいただいたものである。

¹² この点は、窪園晴夫先生（国立国語研究所）より私信としてご指摘いただいたものである（2014年11月14日）。

¹³ 注12と同様、私信によりご指摘いただいた。

引用文献一覧

Abercrombie, David (1960). “‘stress’ and some other terms.” Paper given to the National Phonetics Colloquium, Leeds, March 1960. 【Repr. in D. Abercrombie (1991). *Fifty Years in Phonetics*. Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 81--84】

- Árnason, Kristján (2005). "The standard languages and their systems in the 20th century." Eds., Oskar Bandle et al. *The Nordic Languages: An International Handbook of the History of the North Germanic Languages*. Volume 2. Berlin/New York: Walter de Gruyter, pp. 1560--1573.
- Árnason, Kristján (2011). *The Phonology of Icelandic and Faroese*. Oxford: Oxford University Press.
- Hagstofa Íslands (2013). <http://www.hagstofa.is/Pages/95?NewsID=9581> . 【2014 年 11 月 1 日閲覧】
- Dehé, Nicole, and Allison Wetterlin (2012). "Secondary stress in Faroese: a word game." 11th International Conference of Nordic and General Linguistics, 18-20 April 2012, Freiburg University.
- Dehé, Nicole, and Allison Wetterlin (2013). "Secondary stress in morphologically complex words in Faroese: A word game." Ed., Holden Härtl. *Interfaces of Morphology: A Festschrift for Susan Olsen*. Berlin: Akademie Verlag GmbH, pp. 229--248.
- Einarsson, Stefán (1945). *Icelandic: Grammar, Texts, Glossary*. Baltimore/London: The Johns Hopkins University Press.
- Kristinsson, Ari Páll (1988). *The Pronunciation of Modern Icelandic: A Brief Course for Foreign Students*. Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands.
- Hulst, Harry van der (2014). "The study of word accent and stress: past, present, and future." Eds., H. van der Hulst. *Word Stress: Theoretical and Typological Issues*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 3--55.
- 三村竜之(2014a). 「アイスランド語ストレスアクセント試論」. 『日本言語学会第 148 回大会予稿集』, pp. 158--163.
- 三村竜之(2014b). 「アイスランド語の副次強勢とリズムに関する覚え書き」. 国立国語研究所プロジェクト共同研究第 3 回研究発表会 (2014 年 11 月 14 日、松山大学文教キャンパス).
- Pétursson, Magnus (1978). *Isländisch: Eine Übersicht über die moderne isländische Sprache mit einem kurzen Abriss der Geschichte und Literatur Islands*. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Rögnvaldsson, Eirík (2013). *Hljóðkerfi og Orðhjutakerfi Íslensku*. Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands.
- Thráinsson, Höskuldur (1994). "Icelandic." Eds., Ekkehard König et al. *The Germanic Languages*. London/New York: Routledge, pp. 142--189.

執筆者紹介

氏名: 三村竜之 (みむら・たつゆき)

所属: 室蘭工業大学 大学院工学研究科 ひと文化系領域

Email: m76tatsu@gmail.com